

書評

戦慄の経験の民族誌

——ピエール・クラストル著『グアヤキ年代記——遊動狩人アチェの世界』書評——

毬藻 充 (訳)、現代企画室、2007年、413 + 28p.

= *Chronique des Indiens Guayaki: ce que savent les Aches, chasseurs nomades du Paraguay*. Plon, 1972.

近 藤 宏*

ピエール・クラストルによるパラグアイの先住民アチェについてのこの民族誌がフランス語で出版されたのは1972年である。原著の刊行との間には35年、現地調査との間には約半世紀に及ぶ時差が本訳書にはある。この期間に人類学の内部から「他者の記述」の妥当性の根拠を問いたす試みが生じたことで、民族誌は決定的な批判にさらされた。そのひとつには、民族誌を書くという行為にしばしば内在する懐古的なロマン主義のまなざしに対する徹底的な批判があった。ペシミズムに彩られた本書もまたこの批判を逃れるものではないだろう。翻訳がもたらす時差のために、受容する状況が大きく変化してしまったこの民族誌に今、何を読み取ることができるだろうか。

読者は唐突な形でアチェの世界と出会う。「ベエル！エジョ！クロミ！ワアヴェ！」という翻訳されない呼びかけ、グアヤキ語による呼びかけから「誕生」と題された第1章は始まる。短い滞在期間ではそれほど見ることのできない、子どもの誕生の観察を希望していたクラストルの下に、「…ピチュギの子は生まれた！…」と伝言が届く。クラストルは伝達者に対する怒りを覚えながらも子どもが生まれたという家へと急ぐ。到着し目に入ったのは、足を開いて座り出産を迎えようとする妊婦の姿だった。そこでクラストルは伝達者への怒りが不当であったことを一瞬反省しながらも、出産の観察に目を移していく。そして、「落下」した子どもを「持ち上げる」という行為を重視するという、見ただけでは理解できないグアヤキの出産にまつわる思考のあり方の解説を始める。神話への言及が続く、狩猟などにかかわる概念の考察が展開される。

冒頭からの展開では、見たもの、聞き取った話、人類学者の考察の記述が断絶することなく続く。この記述のスタイルによって、1963年のパラグアイのアチェの世界、空間的にも時間的にも文化的にも大きく隔たった人々が生きる世界を読者へ提示することに成功している。さらに、他者の語りを自身の言語へ組み込めるほどにそれらを理解するという人類学者クラストルの独特な研究実践の質がその記述に示されている。

同様の態度は、クラストルが居合わせることができなかった様々な場面の具体的な記述から読み取ることができる。「二つの平和条約について」と題された第2章では、1953年、クラストルの現地調査に10年先立つ時期からの、アチェと近隣で存在感を増し始めた白人との争いとその講和までの過程が再構成されている。白人に子供が誘拐された時のアチェの人々の悲しみと興奮に彩られた混乱 [58]、白人と講和し、彼の指揮の下に他のアチェのグループを探しにいく人々の戸惑いと恐れ、そしてアチェと白人からなる一団に出くわした時の、別のアチェの戸惑い。語りにあられる出来事を生きた人々の感情の記述には、アチェの人々に対するクラストルの接し方が現れているだろう。他者との接し方に注目しこの民族誌を読むと、首長と権力の関係を考察する記述がとりわけ目を引く。首長ジュウクギが、すべての住民がその内容を知っていることを知りながらも、パラグアイ人からのニュースを執拗なまでに共同体に伝達し続ける様子についてクラストルは以下のように考えをめぐらせていた。

彼の言葉は集団と自分の権力の関係を対等に維持しようとして、事実次のように語っているのである。

「私、ジュウクギはきみたちの首長である。私はそうであることを嬉しく思う。なぜならアチェは導き手を必要としており、そして私はその導き手になりたいと思うからだ。…私は絶えず君たちから承認されるように促し

* 立命館大学大学院先端総合学術研究科 2006年度入学 共生領域

続けねばならず、私はそれを紛争によってではなく平和によって、暴力によってではなく言説によって手に入れるだろう。それゆえ、私は語り、君たちが望むことを行うのだ…」

この言説は想像によるものであるが、ここで表現されているこの政治思想を、インディオたちはある種の仕方で意識しているのである。[102]

ジュウクギの口からは語られることのなかった彼の思考が、一人称によってクラストルの口から語られる。政治思想の平面ではクラストルの思考はアチェのそれに限りなく接近していることがここに読み取れる。

一方で本書には、調査者として現地の人々と接するときの困難、つまり他者との隔たりを意識せざるを得ない様々な出来事が記されている。だが、「概してインディオの注意力が続くのは15分までであった。この時間が過ぎれば、大きなあくびやクワ・イアン [知らない] が繰り返され、対話を続けても無意味であることが分かった。」[147]、「彼女にはクラメロ [キャンディー] の代わりに、メノと聞こえたのである。この語はじっさい、「性交する」を意味していた。彼女は、私自身が言葉のやり取りに疲れてしまい、どこか木の下に行って寝転がり、そこで一瞬彼女の夫を忘れるように彼女に提案していると思ったわけである」[148] という記述や、アチェと同じ速度で進むために、着ていたものを脱ぎ捨て裸にブーツとピストルケースで森を歩くというエピソードは、滑稽さに彩られている。こうした困難には、他者との隔たりが意識されながらも、どこかリラックスした関係が見られるだろう。

ところで、行為や対話の場面以外にも調査者としての困難があったことをクラストルは次のように記している。「女性が不足している原因は、儀礼的生活に直接関係しており…。この信仰を認識するためには、私はいくらかの忍耐が必要であった。私はそれについて学ぶことができたが、それはいくつかの点で戦慄するものであった」[116]。

滑稽さとは程遠い、クラストルを戦慄させる「儀礼的生活」とは、殺人、特に幼い女の子の殺害を伴う「ジュピユ」と呼ばれる実践だった。グアヤキでは、「壮健な男が死ぬとき、いつもジュピユがある。人々は彼のために復讐する」[256]。ただし、死をもたらしたものへの復讐ではない。「見捨てられた状態のために悲しみ、夜に泣いている」死んだ男を慰めるために、彼の「子ども」を殺害するのである。子どもが選ばれるのは、彼らには、死後、身体から離れることで生者に危険をもたらす「イアンヴェ」をまだその身体に備えていないからだ。ただ、「復讐」を行うのは生きている人間だけではない。ジャガーやカワウソなど、森にいる動物も「復讐」する。なぜなら、動物はまれに身体に死者となった人間の霊を隠しており、孤独である状態の悲しみがそれを誘うからだ。

クラストルは、生者と死者・動物といった非人間的な存在と関係に関するさまざまな実践についても詳しい記録を残していた。アチェにおける暴力とは、政治人類学の議論で取り上げられてきた「未開社会」の平等な共同体の形成と不可分な戦争のように、社会学的平面にのみ帰着するものではなく、生者・死者・動物の関係性というコスモロジカルな平面にまで影響する、という事実をクラストルは確かに記していた。だが、クラストルは「復讐」をそのように理解するよりも、戦慄の経験として記すことを選んだ。なぜなら、「復讐」という行為に戦慄していたのは自らの手で少女を殺害したアチェでもあったからだ。

ジャクギの話は朝の間じゅう続いた。ときどき彼はその語りを引きつった長い沈黙で中断したが、この沈黙を尊重すべきだった。…彼はいつものように狩りに出かけるといって、あるいは眠いと言って、その場から立ち去ることもできただろう。だがこの時は、彼は自分に逆らって、自分自身で、あくまでその場にとどまろうとしていた。…言葉は途切れ途切れになり、語り手にあらい、時折聞き取れないものだった！そして、ひとたび言葉が決定的に発音されるや、二つのこぶしを神経質に握り締めて、彼は言葉に熱をこめて繰り返したのである。

「私は彼女の後を追って少し走った。クジャムブク [大きい女] は森に向かって逃げた。彼女は叫んでいた。『あの人は私を殴らたがっている！殴らないで！』と。それで私は、勇敢さを失い、どんな勇気もわいてこなかった。だがその前夜に私は歌っていたのだ。ジュピユをしなければならぬ！と」

あまりにも多くの時間が経過していたのに、彼の胸の奥にはまだ重いものがあつた。[272]

「復讐」がもたらす戦慄はクラストルの身体に閉ざされない。それは、クラストルをジャクギに限りなく近づける、

それも「政治思想」のように言説のレベルを介する事なく、他者と同じ地平に位置づけるような経験だった。戦慄の経験をこのように考えたとき、「チョノ [雷] とベエル [白人] のためにアチェは苦痛を越えるころまで追い詰められているのである。ますます死がアチェのもっとも忠実な同伴者となっていた」[263] と記すクラストルの民族誌に、彼の「ペシミスト」という資質ではなく、1963年のアチェの人々の日常が、彼らの生活を不可逆的に変化させるカタストロフィーを生きる経験だったという事実を読み取ることができないだろうか。

クラストルは調査中から継続する人口減少と、過去の世界との断絶を嘆くジュウクギの歌を記した終章でアチェの「死」をほめかしていた。彼自身が関与することはなかったが、70年代にはパラグアイ国家を相手に先住民虐殺を告発する裁判が行われた。だが、この試みは告発の根拠が崩され失敗に終わった。2008年3月には、アチェは1500人まで人口を増やし、居住区で新しい世界に適合しながらも彼らの文化を生きているという [IWGIA 2008]。つまりアチェという集団は死ななかったのである。

今日のアチェの社会状況がクラストルの予告とは乖離したものであっても、クラストルの民族誌にカタストロフィーを生きる経験を読み取る可能性は残されているだろう。1963年のアチェが生きる日常とは、調査者が7ヶ月もの間森を探索してのその姿を見ることさえできない「本質的にノマド」[Clastres; Sebag 2005] として生きてきた条件が、「彼らはベエルの数が急激に増えていることを知っていたし、彼らがベエルを殺しても、その代わりにすぐさま別のベエルがやってくるだろうことも知っていた」と記されるように、完全に失われてしまった世界だった。この状況を生きる経験を記すクラストルの民族誌は、アチェが生き残ることのできた現代史を改めて問い返すことを現在のわれわれに示しているのではないだろうか。

参考文献

CLASTRES, Pierre and Lucien SEBAG

2005 Cannibalisme et mort chez en Guayakis. *Gradiva* 2 :129-133.

IWGIA

2008 *Los Ache del Paraguay :Discussion de un Genocidio*. IWGIA.

